

二〇二〇年度懸賞論文審査報告



審査委員長 斎藤 峻彦

2010年度における「関交研懸賞論文」には4編の論文の応募があり、これら論文については、6名の審査委員による個別の審査のプロセスを経て、2010年12月20日に審査委員会が開催され、厳密な審議を行った結果、廣瀬有希さん（姫路獨協大学医療保健学部理学療法学科）の論文「離島の旅客船および乗船ゲートにおけるバリアフリーの現状と課題」が第1位に選定され「優秀賞」の受賞が決定した。以下では、今回の応募論文に関する審査および評価のポイントを中心に、当懸賞論文の審査報告をさせていただく。応募された方々には今回の懸賞論文への応募に対し感謝を表するとともに、日頃から運輸交通・観光の研究に研鑽を積まれていることに心から敬意を表する次第である。

● 評価軸の客観化・厳密化

優秀賞の受賞作となった廣瀬論文は、瀬戸内海の離島航路に就航する旅客船と離島航路に使用される港湾に焦点をあて、高齢者や障がい者が

車椅子を利用する場合を想定して、これら施設に関するバリアフリーの達成度を評価し、改善のための課題を明らかにしようとした研究論文である。研究の対象として、笠岡港（岡山県）・真鍋島（本浦港・岩坪港）および姫路港（兵庫県）・家島（真浦港・宮港）の2つの離島航路を選び、これら航路に使用される船舶および港湾施設―乗下船に使用される乗船ゲート、に関する評価を行っている。船舶に関しては当該航路に就航中の3隻の船舶だけでなく、家島航路を運航する事業者が保有するバリアフリー船1隻も評価の対象に加え、バリアフリーの達成度に関する評価軸の客観化・厳密化をはかっている。

4隻の船舶および6港湾の乗船ゲートに関するバリアフリーの達成度は、著者が案出した項目別点数制を用いて評価される。点数は項目別の得点数で表され、船舶に関しては、出入口や通路の幅員、手すり、扉、トイレなどの状況、車椅子スペース、床面の素材などの項目を選び、また乗船ゲートに関しては、スロープの勾配、段差、幅員、手すり、点字ブロックなどの項目が評価の対象とされる。その結果、普通船であれば高速船であれ、在来型の船舶とバリアフリー船との格差が明らかとなり、とくに就航中の3隻に関してはスロープや手すりの点でバリアフリーのガイドラインに即した施設の充足が必要であるとしている。小型船の場合、バリアフリーへの対応に困難が多いものの、通路の荷物がバリアとなる可能性に関しては、空港連絡の列車などに見られるラゲッジスペース設置を提案している。

一方、乗船ゲートに関しては、真浦港の得点が高いこと、滑りやすさへの対応ではすべての事例で評価が高かった反面、利用客数の少ない港湾ほどバリアフリー対策が遅れていることを指摘し、浮桟橋を用いない姫路港・笠岡港においては潮の干満により乗車ゲートに急勾配や大きな

段差Ⅱ笠岡港の場合は最大50cmの段差Ⅱが表れるため、バリアフリーのガイドラインに沿ったスロープの設置が急務であるだけでなく、人的介助のようなソフト面の対策で不足の分を補うことが必要としている。

著者はまた、施設の点数評価だけでなく、離島航路を運営する事業者2社に対し質問票を準備し、車椅子利用客等が乗下船する際の船員および陸上職員の対応について聞き取り調査を行っている。その結果、詳細な対応マニュアルを整備しているかどうかの点で事業者間格差があったことを示す一方で、人的介助の充実をハード施策の改善に代替させる方法については利用者側の心的負担の増加につながる可能性があるとして、ハード施策の重要性について認識することの必要性を論じる。最後に、研究の結果、バリアフリー化に対する個別的な努力が積み重ねられていることを前向きに評価しながらも、全体として改善の余地がまだ多く残され、とくに利用者の少ない港湾におけるバリアフリー化の遅れが目立っていると結論づける。

● 運輸交通・観光政策に 有益な情報を提供した廣瀬論文

審査委員会において廣瀬論文はまず、本懸賞論文の募集理念に高い適格性をもつこと、交通基本法に関連した昨今の議論と整合し重要性をもつ研究テーマを扱ったこと、本研究の成果がこれからの運輸交通・観光政策にとって有益な情報を提供していること、などの点で高い評価を受けた。また、研究に対する緻密な取り組み、評価方法の客観性と適切さ、観察力の鋭さ、丁寧な論述、事前の勉強を含め調査のための周到な準備

がなされていること、などの点も高く評価された。当該航路には使用されていないバリアフリー船を評価の対象に加え、評価の客観性の高めたこと、バリアフリーのガイドラインを超えたプラスαを目指そうとする前向きな姿勢、研究や調査の意義を相手方に伝え、調査の協力を得るとともに事業者に対する聞き取り調査を行うなど、実地調査に寄せる高い熱意と大きな努力を感じさせること、なども審査委員の高い評価を伝えるものである。一方、バリアフリー化の改善の必要を指摘した各種の提言を体系的にまとめることが必要、「離島」の定義に関わる議論や「社会参加」に関する議論が十分深められていない、実地調査の事例数が少ないため、外洋離島の事例などを加え研究対象のバリエーションを増やす必要がある、などの意見や注文も出された。とはいえ、これらの指摘は、本研究の今後の深度化への期待感と表裏一体の関係で表現されたものである。

以上のように廣瀬論文は本懸賞論文における優秀賞受賞にふさわしい品質の高い研究成果であり、著者の努力を讃えるとともに受賞に対しお祝いを申し上げたい。

● 審査結果を左右する ストーリー性・論理性・深度化

一方、応募論文の中には、残念ながら受賞に至らなかったものの、水準の高い論文や研究に大きな努力が注がれ有益な結論に到達した研究論文も含まれていた。ただし、受賞作に多くの点で遜色のない論文であっても、研究全体を流れるストーリー性や論述における論理性の弱さ、あ

るいは研究方法における種々のバランス感覚の欠如や深度化不足¹¹物足りなさ¹²のようなものが審査結果を左右する原因となったことについては一言付け加えておかねばならない。実地調査に関しても、「取りあえず調べてみた」といったレベルの調査ではなかなか説得性の高い結論は得られにくい。準備不足が原因だろうが、調査や取材の方法が十分に練られていない場合も同様で、研究から得られた結論や提言は重要な調査項目の欠如であるとか評価方法における不合理な要素の存在によって大きく左右され、現実離れした評価結果を招いたり、当初の問題認識と研究結果との不整合を生じたりする原因となりやすい。

これらの諸点に配慮していただき、2011年度においてはさらに多くの方々为本懸賞論文に応募されることを心待ちにさせていただきます。

【優秀賞】

『離島の旅客船および乗船ゲートにおける バリアフリーの現状と課題』



姫路獨協大学

医療保健学部 理学療法学科

廣瀬 有希

論文要旨

本研究は、離島と本土を結ぶ唯一の公共交通機関である旅客船と乗船ゲートについて乗下船の際の不便や、改善点を明らかにすることで、離

島という特殊な環境下であり、かつ高齢化の進んでいる地域の高齢者や障がい者の社会参加を改善させる一手段となることを目的とした。

調査対象の船舶は、岡山県笠岡市の本土と真鍋島を連絡している三洋汽船株式会社の普通旅客船「ぷりんす」と高速船「せと」、兵庫県姫路市の本土と家島を連絡している高速いえしま株式会社旅客船「まうら」とした。なお、比較対象として同社のバリアフリー船「しろやま」の調査も行った。調査対象の乗船ゲートは、笠岡港、真鍋島の岩坪港、本浦港、姫路港（2か所）、家島の宮港、真浦港の各港の乗船ゲートとした。方法は、現地に赴いて実施した実測調査と質問紙法による船舶会社への択一解答式質問調査を行った。

過疎の進んでいる離島では、船舶や港が唯一の公共交通機関であるにもかかわらず、船舶側も脆弱な現状（体制）であることがわかった。船舶側においてはバリアが多数存在し、また、乗船ゲートでは、障がい者や高齢者だけでなく健常者にとっても危険を伴う可能性がある状態であるということがわかった。ソフト面に対しても口頭による指示だけであるため、適切な確な作業手順ではない可能性が考えられる。しかし、真鍋島では人と人の触れ合いにより利便性や安全性を確保しており、心温まる場面が見受けられた。そして本研究を進めていく上で、ハード面とソフト面のいずれにおいても改善できるヒントが見つかった。そのため、今後の港湾整備において、港湾のバリアフリー化が進んでいき、障がい者や高齢者が利用しやすい港湾設備となっていくことを期待する。

Keyword バリアフリー 離島 船舶